スタンダールと《国民詩人》ベランジェ

Stendhal and the《national poet》Béranger

井出　勉
Tsutomu Ide

ピエール=ジャン・ド・ベランジェ（1780-1857）はまごうことなきスタンダール（本名アンリ・ベール1783-1842）の同時代人である。《シャンソニエ》[1]として活躍し、《国民詩人》として埋葬されたベランジェのシャンソンは、あれほど19世紀のフランス人民衆を魅了したにもかかわらず、わずかの好事家を除いて現在ではすっかり忘れられていると言っても過言ではない。しかしながらスタンダールは、同時代人として、19世紀前半の他の文学者（バルザック、シャトーブリアン、メリメ、サンドなど）のように、ラマルチーヌと同様の高い評価を与えている[2]。正確には、高い評価を与えていると一般には見なされていると言える。それは特に『イギリス通信』においてベランジェに冠された、最上級やそれに類する表現に負うところが大きいと思われる：《Béranger est le premier des poètes français vivants[3]》、《chansons immortelles[4]》の作者、《le plus grand poète peut-être que la France possède[5]》, etc.

スタンダールのベランジェに対する評価は首尾一貫しているわけではない。もちろん、ベランジェについて述べている研究者は常に留保をつけてはいる[6]。とりわけ『エゴチスムの回想』（1832）では、ベランジェの処世術に対する辛辣な一節も見うけられる[7]。ベランジェについてスタンダールが書いたものの全てを読み直しても、確かに、ベランジェのシャンソンそのものに対する評価はほぼ一貫して高い。実際、アンリ・マルチノーの『スタンダール小辞典』におけるベランジェの項目を読み終えた時には、一種の感動に近いものを覚える。スタンダールとベランジェという生きていたときの評価と後世の評価が一変したとはいえ、二人が互いを認めていた（多少の留保があるにしても）という印象を強く植え付けるものとなっている[8]。日本のスタンダール研究者においても、この「呪縛」から逃れていない感がある。2008年に東京で行われたスタンダール研究会での粕谷祐己氏の《ピエール=ジャン・ド・ベランジェとスタンダール》と題する発表も、スタンダールが大いに感服していたにもかかわらず、現在は不当に忘れられた詩人ベランジェという大前提に基づくものであった。音楽に造形が深い氏ならではの発表で、民衆に愛されたベランジェの姿を垣間見させてくれたが、それでもやはり、《国民詩人》に列せられたベランジェを、スタンダールが愛し続けた《シャンソニエ》として扱うことには納得のいかないものがあった[9]。

1830年にはすでに一線を退いたベランジェに対するスタンダールの思いは、『赤と黒』（1830）執筆時から『パルムの僧院』（1839）執筆時においては大きく変わっていないだろうか。繰り返しベランジェへの言及が見られる『赤と黒』に対し、作中の登場人物に実際に《詩人》が登場する『パルムの僧院』では、スタンダールのベランジェへの評価が変化したことを作品自体が証明しているように思われる。それはシャンソンという《民衆の》言葉で語った《シャンソニエ》でありながら、《国民の》という形容詞を冠され、《国民詩人》として、国葬までされたベランジェの正体をスタンダールが早い時期から見抜いていたことの証左ではないだろうか。そのように見てくると、1830年以前におけるスタンダールのベランジェへの高い評価の表明にも、何らかの計算が働いていたと考えられないだろうか。この小論では、スタンダールの著作におけるベランジェへの言及を再検討し、《国民詩人》ベランジェに対するスタンダールの思いの変化を、『赤と黒』、『パルムの僧院』を中心とした文学作品を通して明らかにしたい。

I《シャンソニエ》ベランジェ

ベランジェは、『自伝』（*Ma biographie*）の書き出しにおいて、《シャンソニエ》は、自分の時代の一過性のありのままのこだまであって、大詩人のような栄光を望む必要はないと述べている。それゆえ、もし自分のシャンソンが後世に生き残るとしても、その時の状況や作者の感情といったものをよく知らなければ理解できないと言う。そして、大詩人でない自分のような一介の《シャンソニエ》が、自分の生涯について後世に書き残す必要はないとしながらも、自分自身が書いた伝記こそが、自分のシャンソンの最高の注釈になるという意見に押された形で自伝を書き始める[10]。このことは『自伝』を書く際の、一つのよくある言い訳とも取れるが、『赤と黒』などでも用いられる「小説とは大道に沿ってもち運ばれる鏡なのだ[11]」という鏡の比喩を想起させておもしろい。『19世紀ラルース大辞典』の「シャンソン」の項目にある、ベランジェの「私のシャンソン、それは私だ」、「私の大多数のシャンソンは内的感情の霊感や移り気な精神の気まぐれでしかない」という文は、19世紀前半のシャンソンというジャンルの一つの特質を、とりわけベランジェのシャンソンの本質を明示しているといえる。そしてシャンソンは必ず歌われなければならない[12]。『ベランジェという詩人がいた』の著者林田遼右は言う：

> 民衆における彼（= ベランジェ）の人気の強さは、彼がシャンソンという形式で作品を発表したことによる。人々によく知られているメロディ（古謡、童謡、流行歌など）に、新たに歌詞を付けるのである。したがって、まだ数の多かった文字の読めない人も、

歌うことによってシャンソンを覚えることができた。《歌う》という行為、《読む》という行為よりも、一層、読者の作品へのかかわりを積極的にする。知的な面よりも感情的・情緒的な面で共感を得やすいのも、シャンソンの持つ強みである[13]。

《シャンソニエ》という言葉・職業は、『19世紀フランス音楽辞典』の定義によれば、シャンソンの作詞家、作曲家、演奏家の区別なく用いていたようである[14]。さらに、「シャンソンという卑俗なジャンルにおいてさえ、俗語や卑語を導入するのにためらいがあった。ベランジェはこれを逆手にとって、雅語と俗語を同時に使ったり、方言を使ったりする[15]」と前掲書で林田遼右が指摘する。それでも「わかりやすく明晰な(simple et claire)言語[16]」で書かれたベランジェのシャンソンを、スタール夫人やシャトーブリアンの大げさな表現(emphase)を嫌ったスタンダールには心地よく心に響いたものと思われる。それはまたミシェル・クルーゼがいう「自然らしさ」(le naturel)の持ち主だからでもあるだろう[17]。

さらに、ベランジェは、スタンダールがその著作を読んで欲しい人物たちの呼称として、巻末の献辞にしばしば用いた、《幸福なる少数へ》(TO THE HAPPY FEW)の「HAPPY FEW」の中に列せられる人物でもある。「イタリア語原稿」の1833年4月24日付の記述に、スタンダールが生涯そう願った、読んで欲しい30人か40人のごくわずかの人物や友人たちの中に、ロラン夫人、トラシー伯らとともにその名を挙げている[18]。また、1815年9月15日付の「出版業者への覚書」(Note pour le librairie)には、出版されたばかりの(1817年9月13日に販売開始[19])『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』(1817)を献呈すべき人物のリストにベランジェの名が挙げられている[20]。また、『アンリ・ブリュラールの生涯』(1835-1836)でスタンダールが思い描く「理想的な社交界の構成員[21]」にもベランジェが入っている。だが、全体として非常に厳しい評価を下している『エゴチスムの回想』(1832)の記述をどう考えたらいいのだろうか。それは「1830年、7月革命でブルボン王政が倒れると、シャルルの王冠が落ちたように、シャンソンの王冠も落ちた、としてさっさと引退してしまう[22]」ベランジェに対するスタンダールの気持ちが大きく変化したことの表れではないだろうか。『エゴチスムの回想』は、1821年から1830年のパリ生活の回想であり、冒頭の部分でやはり「HAPPY FEW」の読者を想定している。

正直に言って、いつの日かこの原稿が出版され、誰か私の愛する魂、たとえばロラン夫人や幾何学者グロ氏のような人に読んでもらえるかもしれぬとでも考えぬかぎり、書く気力はとても出そうにない。が、いずれこれを読む人々は、まだほとんど物心もついてはいまい。未来の読者は、いま10歳か12歳だと思っている[23]。

この「誰か私の愛する魂」に、執筆時、ベランジェは入っているのだろうか。原稿の状態のみで死後1892年にようやく出版された『エゴチスムの回想』は、表題の下に「私の死後少なくとも10年を経ぬかぎり、出版を見合わせること。名を挙げた人々への配慮による。もっとも、その3分の2は今日すでにこの世に亡い[24]」という記述がある。さらに、名前も全て変えて欲しいし、印刷するとしても死後50年経ってからにして欲しいという署名入りの書き込みもある[25]。つまり、スタンダールは、『エゴチスムの回想』では実名を挙げてかなり辛辣に本音で批判していることへの断りであると読み解くことに問題があるだろうか。それゆえ、1830年以降は特に、ベランジェに対して辛辣になっていくというか本音で語っていると考えられないだろうか。

タルマはおそらく後世の人々によって高く評価されるだろうし、たしかに悲劇の精神を体得していた俳優だったが、彼は愚かにも、最も嗤うべき、わざとらしい演技に陥っていた。知性の全面的欠如もさることながら、その上彼には、成功を得るきっかけとして不可欠な、あの観客に媚びる奴隷根性があったのではないかと思う。実に情けないことだが、あのみすぼらしい、愛すべきベランジェにさえ、私はその種の根性があるのを見た。

してみれば、おそらくタルマなどは、奴隷的で卑屈で、追従的で、おべっか使いで……ということになるに違いないし、スタール夫人に対してはたぶんそれ以上のことがあったのだろう[26]。

スタンダールが「奴隷根性」(servilité)と呼ぶ、早すぎる引退をしたベランジェの処世の仕方に対するスタンダールの口調は厳しく、繰り返し糾弾する。

たしかこれもバラゲー・ディリエ夫人から聞いた話だと思うが、私が愛誦してやまず、常に懐中していたある実に楽しいシャンソンの作者(= ベランジェ)は、例の二人のおいぼれ猿、すなわちジュイ、アルノーの両氏、それからあの身の毛もよだつダヴィリエ夫人の誕生日のために、いくつも小詩篇を作っているということだ。そういうことだけは、私は一度もしたことがない。もちろん『イヴトの王様』とか『上院議員』とか『祖母』のようなものを書いたことがないのも事実だが。

ベランジェ氏は、こうしたおいぼれ猿どもに取り入ることで大詩人の称号(もっともそれは至極当然の称号だが)を得て満足していたから、あれほど多くの自由主義者たちが身を売ったル

イ=フィリップの政府に取り入る気はさらさらなかった[27]。

ベランジェの代表作と言える『イヴトの王様』を始め、『上院議員』、『祖母』のシャンソン[28]を確かにスタンダールは好んだが、この時の《人間》ベランジェの処世術には、タルマやスタール夫人を引き合いに出して手厳しい。もっとも、「民衆の息子」として登場しているものの(『民衆の娘』と題するシャンソンも書いている)[29]、ド・ベランジェと署名するようになったベランジェの貴族の出自を巡っては、自らのシャンソン『いやしい者』で、はっきり否定しつつも、同名で別人のシャンソニエのベランジェと区別するために仕方なく付けたと『自伝』で言い訳している姿には、上記の『エゴチスムの回想』の一節が自然と目に浮かんでくる[30]。スタンダールも、単にベランジェと読んだり、《詩人》のベランジェ(シャンソニエとは呼んでいない)、ド・ベランジェ氏と呼んだりしている[31]。この点は、1830年のギゾーへの《就職活動》やアカデミー・フランセーズ入りを夢見たり、ペンネームにやはり、《ド・スタンダール》を用いたスタンダールにどうこう言う資格はないと思われるが[32]、それでもギゾーよりも卑しい輩と考えているジュイやアルノーにへつらう《人間》ベランジェが許し難かったのだろうか。正統な貴族の出自かどうかに言及する『リュシアン・ルーヴェン』(1834-1835)の以下の一節はより一層意味深である。

「どんな主義にです?」

「ルイーフィリップが倒れると、また93年がやってくる」。

「それを倒すつもりですって!こいつはおもしろい」。

未来の殉教者は、かってはシャルル10世近衛隊の選抜兵つき大尉で、スペインその他で輝かしい武勲を立てたことがある。その青白い両頬は、古い家柄が問題となるときにかぎってほんのり紅潮してくる。じじつ、彼の家はヴォーデモン、シャステリュクス、リルボンヌといったプロヴァンス地方のあらゆる最上層階級と縁つづきなのだった。リュシアンは、この善良な貴族が奇異な考えをもっているのを発見した。つまり、自分の名前がパリで知られていると思いこみ、一種の本能的な嫉妬から、ものを書いて名をなす人間にははげしい怒りをしめすのである。たまたまベランジェの名が出て、シャルル10世の没落をお膳立てした強力な危険人物の例としてベランジェの名があげられた。

「あの男は得意になっているにちがいない」とだれかが言った。

「しかし、わたしが思うに」とドカンクール氏は力をこめて言った。「あれの先祖が聖ルイ王に従って十字軍遠征に出かけたのなら格別、でなければそう得意にもなれないだろうよ」。

この対話はリュシアンを魅了した。おもしろいことを教わったうえに、話をしている当事者にだまされずにすむという二重の喜びが味わえたからだ[33]。

こうした文脈で見ていくと、1837年5月5日付の『ある旅行者の手記』の以下の一節なども、ベランジェに対するスタンダールの本音が透かし見える気がしてならない。

私は平々凡々な人生を送るはずだったのに、波瀾に富んだものになってしまった。16の歳まで、ギリシャ語とラテン語に苦しめられ、いま頃になってようやく、憎悪の対象でなくなりかけてきた。税関の職についたら、下院議員の父は、私が仕事に追いまくられるような手をまわしておいてくれた。ある晩、勤務地の村のご婦人たちと草原を散歩しながら、ベランジェのシャンソンを歌ってしまった。所長がその話を聞きつけ、1ヶ月後に、マルティニック島への転勤命令が下った。

この島で、私は諸手をあげて歓迎された。イエズス会の犠牲者ということで、ひどく好意を寄せてくれる友人が何人もできた。いまでも、あそこに留まっていても不思議ではない。あの風変わりな生活が限りなく気に入っていたからだ。しかしある日のこと、私は陽光にさらされながら仕事をした。

日射病にかかり、半死半生のまま、ヨーロッパ行きの船に乗せられた。命は取りとめた。到着の頃には治ってしまったのだ。任地に戻ろうとしていると、父が裕福な鉄商人の娘との結婚話を持ちかけ、私もその商売にたずさわることになった。妻は亡くしたが、そのまま鉄の商売を続ける。12年の間、その昔ギリシャ語やラテン語を相手にしたときと同じように勤勉だった。自分でもほとんど気づかないうちに、財産ができた。いまでは父が私の最も親しい友人である。事を荒だてないでできるようになれば、すぐにでもマルティニック島へ戻るつもりだ。金を稼ぐためではない。生活を楽しみたいのだ[34]。

あまり深読みをしてもいけないが、1837年という日付ゆえに素直に反体制の詩人としてのベランジェを認めているがゆえの一文と読むのが難しく思われる。むしろ皮肉を感じる。

最後に、スタンダールの遺書を検討してみたい。最上級を使ってまで、讃美しているベランジェが、なぜスタンダールが何通も書いている遺書に登場しないのか。特にベランジェに対して辛辣だった『エゴチスムの回想』(1832)の遺書には、生涯を通して愛したチマローザ、モーツァルト、シェイクスピアの3人の名前は挙げられていても、ベランジェの名はない。

これまでの生涯に、私が情熱をこめて愛したのは、チマロー

ザ、モーツァルト、そしてシェイクスピア、この三人だけである。

1820年、ミラノにいたころ、私はこのことを自分の墓石に記したいと思っていた。毎日その墓碑銘のことを考えたのは墓の中以外に安らぎを得ることはあるまいと、本気で思っていたからだ。トランプのカードの形をした大理石の板が望ましく思われた[35]。

そして実際、以下のような碑文を考えている。

ERRICO BEYLE MILANESE VISSE, SCRISSE, AMO QUEST' ANIMA ADORAVA CIMAROSA, MOZART E SHAKSPEARE MORI DI ANNI ..... IL 18	エルリコ ベーレ ミラノ人 生きた、書いた、恋した その魂の 熱愛せるは チマローザ、モーツァルト、シェイクスピア 享年 ..... 歳 18 ..... 年 ..... 月 ..... 日 没[36]

生涯最も熱愛した人物として墓碑銘にその名が挙げられていないからと言って、前述したようにスタンダールが「HAPPY FEW」の中にベランジェも入れていたこともまた事実である。実際、スタンダールが1839年4月に出版された『パルムの僧院』をベランジェに送っていることが、1841年9月8日付のベランジェのスタンダール宛書簡からわかる[37]。それでもやはり『ある旅行者の手記』の、1837年6月22日のトゥールにおける一節は、スタンダールが終始ベランジェに対して抱いていた内的距離の証左である様に思われるのだ。

トゥールの有名なサン=マルタン教会には遺跡のかけらも残っていないことを知っていたので、あとは自然の美を楽しむしかなく、橋の北に広がる丘を興味深く歩きまわる。まったくすばらしい眺めの丘で、ちょうど南に面し、大きな川と肥沃な土地を見下ろせる。ここにフランスで最も誠実な人間、おそらくは今世紀最大の詩人が、質素な隠居所を構えているのだ。この清い生活と、陰謀屋どもの生活とは何たる違いか!パリで奸策に日を送れば、何かありつける。一人の百姓に、ざくろ屋敷はどこかと訊いてみた。

「へえ、ベランジェさんのお宅ですかい!」と相手が叫ぶ。まるでその名前をよく知っていて、好感を抱いているらしい口ぶりだった。

「岩山に掘られたあの洞穴の上にありますよ。」

すぐにそこへ登る。

しかしドアをノックする段になって、遠慮という名の美徳が目の前にちらついた。あれほど正しい判断を下せるお方から、現今の事件について意見を聞けたら、何と楽しいことだろう。「しかし」と私は思った。「あの方が好きで崇拝する旅行者が、みんなざくろ屋敷のドアをノックしたら、パリのパッシーを離れずにいるのと同じではないか。」

そこで私は橋の方へ下る街道に取って返した[38]。

晩年のスタンダールが抱くようになったベランジェへのこの違和感がどこから来るのか。さらに、次章で検討を加えたい。

Ⅱ《獄につながれた》ベランジェ:《詩人》ベランジェの誕生

前述したように、スタンダールはベランジェを、単にベランジェと呼ぶときもあれば、ベランジェ氏、ド・ベランジェ氏とも呼ぶ。後者のド・ベランジェ氏という呼称はとりわけ1825年の『イギリス通信』に多く見られるようだ[39]。同じ『イギリス通信』内でも、スタンダールはベランジェを《シャンソニエ》ではなく、ほとんど《詩人》と呼んでいる(1827年の記事では「我々の有名なシャンソン作者、ベランジェ氏[40]」と呼んでいるのが目につくくらいである)。では、ベランジェ自身は自らをどう思っていたのか。《シャンソニエ》なのか、後には《国民詩人》に祭り上げられるように、やはり《詩人》なのか。スタンダールが《詩人》と呼ぶベランジェとベランジェ自身が《詩人》と呼ぶ物言いに違いがあるのだろうか。

ベランジェは1821年12月8日に重罪院で裁判を受け、3ヵ月の禁錮と500フランの罰金を宣告される[41]。そしてベランジェの『自伝』によれば、ポール=ルイ・クーリエがそれまで入っていたサント=ペラジー監獄の同じ房に、1821年12月19日から1822年3月18日まで入牢する[42]。この当時、38歳のスタンダールはロンドンから戻ってきてパリに居を構えている[43]。それゆえ、すっかり名声の上がった《有名人》ベランジェを牢獄に訪問することは可能であった。しかし、スタンダールは面会に行かない。自分の著書を贈っているとはいえ、この当時、ベランジェを個人的に知っていたかどうかは定かではない[44]。しかし、少なくとも面会に行く口実にはなったはずである。確実にサロンで顔見知りになっている1828年において、ベランジェが前回よりも苛酷なラ・フォルス監獄に二度目の入牢[45]をした際にも、スタンダールは(自身既に40代半ばを過ぎているが、3歳年上のベランジェにとってはさらに牢獄は苛酷であったと思われる[46])牢獄への面会を果たさない。やはり前回同様、1829年の9月8日にパリを発ってボルドーへ行くまでスタンダー

ルは、ベランジェの入牢期間の9ヵ月のほとんど、パリに滞在している[47]。そしてその当時の心境を、後に『アンリ・ブリュラールの生涯』で回想する。

> 1814年には、私はたいへん金になる地位をことわった。1828年には、チエール氏（前 外務大臣）、ミニェ氏、オーベルノン氏、ベランジェ氏と親しい交際仲間であり、そのサロンで私はたいへん高く評価されていた。私には、オーベルノン氏は退屈でミニェ氏は才気がなく、チエール氏はあまりに厚顔な饒舌家と思われた。ベランジェだけが私の気に入ったが、権力に媚びるように思われるのがいやなので、彼が牢屋にはいったとき会いに行かなかった。そして、オーベルノン夫人が私を不道徳な人間だと思って毛嫌いするままにしておいた[48]。

果たして「権力に媚びるように思われることがいやなので」、スタンダールは牢獄に面会に行かなかったのだろうか。ベランジェの『自伝』にしても、『アンリ・ブリュラールの生涯』にしても、自伝の文章を文字通り受け取るのは危険である。スタンダールの『イギリス通信』ものでは珍しく、ベランジェのシャンソンを諸手を挙げて褒めていない、1825年5月1日の『ニュー・マンスリー・マガジン』誌の記事は一読に値する。

> 私は1週間後に出る新しいシャンソン集（ド・ベランジェ氏の）を読み終わった。最も強い印象を受けたのは、アメリカ合衆国におけるド・ラファイエット氏の勝利についてのものである。フランスの詩人の中でおそらく最大の詩人であるベランジェ氏は、大事件や政治的論議の高まりなどを見逃すことがない。パリの人々の生きた意見がそこに反映するのである。彼のシャンソンはしたがって、まさに国民の歌（オード）である。
>
> それらはフランス人の胸に深く響く。この書は、今まで刊行されたのより、少し劣るように思える。あまりにオードに近寄り過ぎたように思える。彼はしばしば難解になる。しかしこの本は大成功をおさめるだろう。この貧乏な作者に、印税として2万フランが支払われたという[49]。

おそらくスタンダールは、サント・ペラジーへの入獄以来、一層高まってきたベランジェの人気に対する嫉妬も大いにあったと思われるが、ベランジェのいささかわざとらしい無欲な姿勢への反感も感じ取れるように思われて仕方がない。林田もベランジェの計算された無欲さを指摘する一人である。

> ベランジェは、しばしば自分の私生活をシャンソンで歌った。彼は、清貧に生き、権威にこびず、職を失っても反体制の態度を変えず、名声を求めない《無欲》な姿を人々に宣伝するのにたけていた。反体制のシャンソンの人気が高まるには、その作者がその行為の代償に何の利益も受けていないことが必要である。ベランジェは、人気が高まってからも、要職にもつかず、年金ももらわず、一介の《シャンソニエ》という肩書きのみを大切に守った。
>
> たしかに彼は無欲だったが、自分の栄光を保つための計算があったこともたしかである[50]。

だが、牢獄体験は、ベランジェを、一介の《シャンソニエ》から《詩人》に格上げする。『自伝』の中でもいくらか誇らしげに認めているように[51]、1822年の『エディンバラ・リヴュー』誌の記事において、ベランジェはラマルティーヌと並ぶ《詩人》として紹介されている[52]。イギリス人が最初に自分を《詩人》として認めてくれたことを、「不思議なこと（chose étrange）！[53]」とベランジェは言うが、『エディンバラ・リヴュー』誌をスタンダールが1816年に発見して以来[54]、高く評価しその熱心な読者であったことを知る我々にはより一層、「不思議なこと」であるように思われる。そのせいかどうかはともかく、前述したように、スタンダールはベランジェのことを、ほとんど《詩人》として呼んでいることは興味深い。しかもスタンダールがしばしばラマルチーヌと並べてベランジェの名を挙げていることも考慮する必要がある[55]。さらにラマルチーヌに対するスタンダールの評価が、彼のアカデミー入りの画策[56]などから急落している。P.-G.カステックスが指摘するように、1825年4月に ベランジェの『Nouvelles Chansons』の出版後には、スタンダールの中では、それまでベランジェと並べていたものが、ベランジェの後塵を拝するようになる[57]。ベランジェもやがて、後述するように、《国民詩人》としての名声が高まるにつれて、スタンダールの中では、その評価はラマルチーヌに対するのと同様に低くなっていくのでないだろうか。

《獄中に入った詩人》ベランジェに対して、当初は、妬みというほど強くは意識されたいなかったと思うが、獄に入ることで、トウシャールが言うように、《有名》ではあったが《栄光》は手にしていなかったベランジェが、一介の《シャンソニエ》からイギリス人からも認められる《詩人》となっていく[58]。それもすべて、スタンダール自身が体験できなかった入獄という試練のおかげである。一度ならず二度も入獄し、そのつど名声が上がっていくベランジェに、スタンダールが嫉妬を抱かなかったと言えば嘘になるのではないか。それが証拠に、ベランジェの入獄後に書かれた『パルムの僧院』（1839）の《詩人》は牢に入る。しかもそれは《幸福なる牢獄[59]》であるのだ。ベランジェの入獄が例え世俗的な《栄光》をもたら

した《幸福な牢獄》であったにせよ、スタンダールが後年の読者や「HAPPY FEW」にしか期待できなかったものを、ベランジェは二度の入獄で手に入れる。このことこそが、サロンで顔見知りであっても、スタンダールとベランジェの間に壁が築かれ、牢獄への面会やトゥールでの訪問を遠慮したことをわざわざ『ある旅行者の手記』に書いた理由ではないだろうか。こうしたベランジェとの関わりから見直すと、自分自身がまとえなかった入獄体験をした作家というアウラを、スタンダールは自らの小説の登場人物に《迫害》、《入獄》や《欠席裁判での判決》というアウラをまとわせることで、一種の意趣返しをしているようにも思われてならない。

Ⅲ《国民詩人》ベランジェとスタンダールの《詩人》

1822年に出所して以来、ベランジェは《獄中に入った詩人》としてのアウラをまとう。トウシャールによれば、《国民詩人》というレッテルを貼ることに貢献してくれたのが、友人であるティソ、ジュイ（前述したようにスタンダールが嫌う類の人物であり、『エゴチスムの回想』でジュイの誕生日にベランジェがシャンソンを書いたことで憤慨している）が書いた1823年の記事やエッセーが出所であるようだ[60]。一種の仲間褒めの産物である《国民詩人》という呼称に関して、スタンダールがティソやジュイの書いたものを読んだとしたらどう思っただろうかと想像するのはおもしろい[61]。ベランジェやクーリエ同様、やはりサント=ペラジー監獄に入獄し、牢獄体験が文学者を際立たせ、名誉という肩書きを与えると得得と書いているジュイやジェの『牢獄での隠者あるいはサント=ペラジーの慰め』の一節は、牢獄体験がいかに名誉への近道かと言うことを、いかに利用価値が高かったかということを端的に物語っている[62]。スタンダールはベランジェのサント=ペラジー監獄への収監に関して『恋愛論』（1822）では、パリの民衆の熱しやすく冷めやすい、一時的な熱狂ぶりを揶揄している。『バークベックの旅行記』からの引用という体裁をとっているが[63]、スタンダールの民衆に対する距離感も感じられる一節である。

パリの民衆の注意力には限度があって、それが3日間である。3日を過ぎた後になって、ナポレオンの死とか、ベランジェ氏の懲役2ヵ月のことをもち出してみたまえ。4日目にそれを話す人に対してと全く同じ感動か、同じ気の利かなさしか起こさない。大都会は、みなこうなんだろうか。それとも、パリの人々がお人好しで、軽薄なためだろうか。ロンドンは、貴族的な自尊心と、びくびくした臆病とのおかげで、多くの隠者の集まりにすぎず、これは首府とは言えない。ウインは、15万の職工と従僕にかしずかれた200家族の寡頭政治にすぎず、これもまた首府ではない。ナポリとかパリだけがただ2つの首府である。

『バークベックの旅行記』抜粋371頁[64]

『赤と黒』（1830）では、ラ・モール邸のサロンで、ふと耳にした「当代第一の大詩人」（=ベランジェ）に対する悪口には、ジュリアンは涙を流すほどの怒りを覚える。

「なぜあの男を10年の禁固にしなかったのですか?ああいう毒蛇のたぐいは、地下牢の奥に閉じ込めてやるべきです。日の目を奪って死なせるようにするのです。さもないと、毒気が拡がって、ますます危険になります。1000エキュの罰金を科したところで、なんにもならない。あの男が貧乏なら貧乏でいい、いやそれならなおさらのこと、党がかわりに払ってくれます。罰金500フランと地下牢10年を科すべきだったのです」

《おやおや！いったい、その悪党っていうのは、だれなのだろう?》ジュリアンは同僚のはげしい口調と、性急な身振りに感心しながら、そう思った。アカデミー会員の愛甥の、痩せてひねこびた小さな顔が、このとき、いかにも醜かった。ジュリアンはやがて、それが当代第一の大詩人のことだと知った。

《このひとでなしめ！》と、ジュリアンは心で叫んだ。口に出かかったほどだった。義憤の涙が目頭ににじみ出た。

《この乞食野郎め!覚えていろ！》

《だが、侯爵が幹部のひとりとして関係している党派の決死隊ってのは、こんなやつらのことだ！ところで、こいつはさかんにけなしているが、あの有名な詩人だって、身を売りさえすれば、勲章や閑職など、いくらでも集められたのだ!身売りするったって、むろんくだらぬネルヴァル氏の内閣などにではない。さきごろ相ついで出た、いちおう誠実な大臣のうちのだれかに身売りしていたらというのだ》[65]

さらに、《死刑宣告》というアウラをまとったアルタミラ伯爵の口から投獄されたベランジェの名前が、クーリエとともに挙げられる。

「わたしがここに招かれているのは、わたしの家柄のおかげなのです。だが、この国のサロンでは思想はきらわれています。思想は通俗喜劇の気のきいた台詞以上に出ないこと、それなら褒美をくれますよ。だが、思想のある人間が、どぎつい斬新な機知をふりまわすと、シニックだといわれます。この国の裁判官でしょう、クーリエをシニックだときめつけたのは?クーリエも、ベランジェと同じように、投獄されたわけです。お国では、才気でちょっと目だったことをするものは、ことごとく修道会の手で軽犯罪

裁判にかけられてしまう。それを上流社会が拍手喝采するというわけです[66]。」

『赤と黒』には、スタンダールも高く評価した18世紀のシャンソニエ、コレ（1709-1783）[67]のシャンソンを作品中に引用し、コレに仮託してベランジェのことをほのめかしている場面もある。

「いま申したとおり、フェルヴァック元帥夫人は、憎しみの念がはげしいひとなのです。会ったことのない連中まで、容赦なくやりこめるのです。相手が弁護士だろうと、コレみたいな、シャンソンを作った三文文士だろうと。ご存じでしょう?

わたしゃ酔狂（マロット）で
マロットに惚れた、云々」

こうして、ジュリアンはこのシャンソンの全曲を聞かされる羽目になった。（…）

「元帥夫人は、例のシャンソンの作者を免職させてしまったんですよ。

ある日、酒場で恋人が……」（…）

「元帥夫人がこのシャンソンに腹をたてたとき、わたしは注意したのです。あなたのような身分のおかたが、くだらない出版物をいちいちお読みになるものではありません、とね。いかに神信心やまじめな風潮がさかんになろうとも、やはりフランスではキャバレー文学はなくなりませんよ。この作者はつまらん退役士官なのです。で、フェルヴァック夫人がこの男から1800フランの職を取り上げさせたとき、わたしはいってやったのです、気をおつけなさい、あなたはあの三文詩人を、お得意の武器で攻撃なさったが、相手もお得意の詩で仕返しするかもしれません。貞女気質をシャンソンにしますよ。金ぴかサロンの連中はあなたの味方をするでしょうが、冗談ずきの連中のあいだでは、その風刺詩が流行りますよ、とね。すると、元帥夫人はなんと答えたと思いますか?主なるイエスさまのおんために、わたくしが殉教者の道をたどる姿が、パリじゅうのひとの目に映るでしょう。フランスでは珍しい光景になりますわ、というのです。（…）[68]」

ガルニエ版のP.-G.カステックスの註によれば、引用されているシャンソンは確かにコレのものだが、元帥夫人に迫害されたシャンソニエはベランジェであると断じている[69]。通常は迫害されたり、獄に入ったシャンソニエの方が「殉教者」を気取るものだが、ここではシャンソンに歌われたフェルヴァック夫人の方が「殉教者」気取りなのがおかしい[70]。

『赤と黒』では上記の例以外にも、ベランジェへの言及がある[71]。もちろん「19世紀年代記」の副題をもつ『赤と黒』であるだけに、実在のシャンソニエの名が挙がることは当然である。一方、『パルムの僧院』（1839）では、登場人物が《詩人》としての役割をもつ。

『パルムの僧院』は韻文でなく散文で書かれた《詩的小説》であるということは、モーリス・バルデッシュを始めこれまでも繰り返し指摘されている[72]。それは『パルムの僧院』全体にあふれる詩情が醸し出す雰囲気が作品全体を支配し、一幅の詩として我々に提示されているからである。だが、作品自体の詩情だけでなく、3人の登場人物が《詩人》として果たしている役割も重要である。この点についてはかって『『パルムの僧院』における「詩人」の役割　−Fabrice, Ferrante Palla, Ludovic について−』と題する修士論文で論じたことがある[73]。今回はベランジェとの比較でもあり、改めて詳しく論じるだけの紙幅もないので、3人がどのような詩人かと言うことだけを指摘したい。

ナポレオンのためにワーテルローに馳せ参じるファブリス、暴君を憎むフェランテ・パラ、ファブリスの逃亡に力を貸し、これまでの「俗語の詩人[74]」（poète en langue vulgaire）としての生活を放擲するロドヴィコ、彼らはいずれも体制に反逆する《詩人》として行動する（貴族であるファブリスと違い、フェランテ、ロドヴィコは、ベランジェのように民衆詩人である）。しかし、《詩人》といっても、『赤と黒』のようにシャンソニエが問題となるのではなく、ソネットを作る《詩人》としてである。イタリアを舞台とする『パルムの僧院』ゆえに、シャンソンではなくソネットの方がより民衆の詩としてふさわしかったと思われる。散文でなく韻文の14行詩であるがゆえか、3人のソネット自体が『パルムの僧院』に直接現れることはなく、我々はただソネットの内容と調子のみから想像するしかない。ファブリスのソネットは、クレリアとの恋の符牒として、聖ヒエロニムスの著書の余白に書かれる[75]。

欠席裁判で死刑の判決を受け自ら「護民官[76]」（tribun）を任じ、生活のためやむなく「山賊[77]」（brigand）を働く一面を持つフェランテは、ダンテに比され[78]、「今いちばん偉大な詩人の一人[79]」（l'un des plus grands poètes du siècle）と評される。さらに、『その……はいつか議会と予算を持つであろうか』という著作も書いている[80]。サッカの森のロビンフッド的人物[81]フェランテは、『ラミエル』草稿のラスネール的人物、ヴァルベールに比すことができるし、その「護民官」という地位から平等主義者バブーフの姿を重ね合わせることもできる[82]。さらに、バルザックは『ベール氏論』で「私は、自分自身も、同じような人物像を大事に育てたことがあるので、よけいに、このフェランテ・パラの創造にたいし熱烈な賞

讃をおくるのである[83]」と述べている。この「同じような人物像」とは、『幻滅』や『カディニャン公妃の秘密』などに登場するヨーロッパ連邦を夢見る共和主義者のミシェル・クレチアンである。彼はまた、サン・シモン主義者でもあり、美声でベランジェのシャンソンを歌う[84]、「気高い平民[85]」でもあるのだ。『幻滅』の主人公リュシアン・ド・リュバンプレもソネットを作る。そのリュシアンが、なぜ今ソネットで詩を書くかと述べている箇所は一読に値する。

「ソネットというものは、詩のうちでも一ばんやっかいな作品なんです。この短詞はいまでは一般にかえりみられていません。ペトラルカに匹敵しうるものはフランスにはだれひとりいなかったんです。というのは、ペトラルカの国の言葉はフランス語よりはるかにしなやかで、そこでこそ軽妙な思想の表現も可能だったわけですが、この軽妙な思想はフランスでは実証主義（こういう言葉を使うのをゆるしてください）によって排斥されてしまいました。ですから、ソネットの詩集をもって文壇に乗り出すということは、独創的だとぼくには思えたので。オードはヴィクトル・ユゴーのものになってしまっているし、カナリスは即興詩をやっている。シャンソンはベランジェの専売特許だし、カジミール・ドラヴィーニュは悲劇を、ラマルチーヌは《瞑想》を、こういうありさまですからね[86]」

「俗語の詩人」ロドヴィコの、「俗語」とは何だろうか。モンタネッリ、ジェルヴァーゾ共著の『ルネサンスの歴史』によると、「初めてイタリア語を学問的に考察した[87]」『俗語論』で、「ラテン語がすでに死語と化したことを明確に認める一方、「俗語」すなわち話し言葉が正しく彫琢されずに各地の方言のままに終る危険を、強く懸念している。俗語を美しく力強い「国語」に高めるためには、国民的統一を体現する宮廷が必要だとダンテは考えている[88]」とのことだ。そして「国民統一の最大の武器をイタリア人に与えた。すなわちイタリア語である。ラテン語をあやつるどうしようもない修辞家にみちみちていたイタリアで、「俗語」が高貴なものとなったのは、まったくダンテのおかげである[89]」と断じている。しかしロドヴィコのソネットを聞かされたファブリスは、言葉に出されるや否やロドヴィコの優れたものの見方が色あせているのに気づくのである[90]。ロドヴィコが犯す綴り字の誤りに[91]、劇作家を夢見たスタンダールの韻文で書くことに対する思いを読み取ることは容易であろう。しかしながら、単純に、韻文での才能の欠如が散文での小説の成功につながったと断じることも避けたい[92]。もちろん「仕事の場や街のささやかな事件がテーマであろうと、あるいは創作した物語であろうと、散文や韻文の形態が無頓着に使われた。想像上のできごとを表現するためにはより多く散文が、事実については詩が利用され、そして韻文こそが民衆の現実のありようをより厳密に表すかのように使用され、他方これが民衆の文化の普通の形態をなし、さらには民衆の言葉遣いの普通の形態でさえあるかのようであった[93]」とルイ・シュヴァリエが指摘するように、19世紀前半には、韻文が民衆にとって身近なものであったことも忘れてはならないだろう。

ファブリスの大変な成功を収める説教も、スタール夫人が描いたコリンヌのように、聴衆を魅了する即興詩と考えると[94]、これら3人の《詩人》が『パルムの僧院』の詩的世界を構築するのに大きな役割を果たしているのがわかる。さらに、ファブリスのファルネーゼ塔への入獄[95]、サンセヴェリーナ公爵夫人から提示されるフェランテのパルムの隠れ家[96]は2人に《牢獄のアウラ》をまとわせる。フェランテとともに、ファブリスの脱獄に尽力することで、ロドヴィコもまた《牢獄のアウラ》をまとった《詩人》といえるのではないだろうか。

※

ベランジェというスタンダールの同時代の《詩人》は、現代ではすっかり忘れられている。もともと一介の《シャンソニエ》というものは、同時代の人々の胸に訴えるシャンソンを書き、なじみやすいメロディーを伴って人口に膾炙するものである。それゆえ、大いに流行ったものはいくらか忘却の淵から救われるとしても、ほとんどの《シャンソニエ》はエフェメールの輝きを放った後消えていく。それでもベランジェは、《シャンソニエ》から《国民詩人》に祭り上げられ、ユゴーのように国葬に遇される。1842年にスタンダールが亡くなってから、はや15年近くの歳月が流れた1857年7月17日のことである。前日に出された警視総監の布告は、ベランジェがたどり着いた《栄光》がどういう類のものだったかを示している[97]。

フランスは国民詩人を失った。

帝政政府は人々がベランジェに対して深い追悼の意を表すように望んでいる。

詩人に対して敬虔な感情が表明されるのは当然である。彼の祖国愛に満ちた歌は、民衆の心の中に、帝国の栄光を永遠に刻みつける役を果たしたのである[98]。

30万とも50万ともいうパリの人々が参列した葬儀に、数人の参列者のみのスタンダールの葬儀など比べるすべもない[99]。ナポレオン3世の政治的思惑はともかく、国葬に伏されたベランジェがいかに《民衆》から慕われていたかがよくわかる。だが、ベランジェの《民衆》とスタンダールの《民衆》では全く違うのではないか。確かに、スタンダールも『赤と黒』のジュリアンに代表されるように、平民を描いている。『パルムの僧院』のフェランテやロドヴィコも民衆

詩人である。小説の中で、いかにスタンダールが《民衆》を描こうが、スタンダールは《民衆》の中に入っていくことはできない。『アンリ・ブリュラールの生涯』におけるサン-タンドレの教会堂でのジャコバン会の集会の一節は、はっきりとそのことを物語っている。

> 印象はわるく、愛することができたならと思ったこの人々がおそろしく下品なことに気がついた。せまくて天井の高いこの教会堂は、ひどく照明がわるく、私はそこに最下層の階級の女たちをたくさん見出した。要するに、私はそのころも今日と同じだ。私は民衆を愛し、その圧制者を憎む。だが民衆といっしょに暮らすことは、私にとっては各瞬間の責苦であろう。(…)私はあまりにも繊細な皮膚、女のような皮膚をもっている(あとになって、1時間サーベルを握っていると、いつも豆ができた)。私はたいへん形のよい指をもっていたが、わずかのことでそれをすりむいた。要するに、私の身体の表面は女のようであった。おそらくそこから、きたならしい、またはじめじめした、または黒っぽい様子をしたものにたいする計り知ることのできぬ憎悪が生じた。こうしたものの多くがサン-タンドレのジャコバンたちに見出された[100]。

たとえ、『ある旅行者の手記』で、ベランジェのシャンソンを口ずさもうとも、我々はドニ・プロが『崇高なる者』で描く労働者たちとともにスタンダールがシャンソンを歌う姿など想像だにできない[101]。「趣味と傾向において貴族である人間たちが、スタンダールがその何冊かの著書の結びにおいている「若干の幸福者へ」というあの言葉を、ほかならぬこの自分たちに向けられた言葉であると思いこんでいるとしたら、そのお人よし加減もいいところである。若干の幸福者、すなわち、スタンダールの愛する魂をもった人びとは、おそらく、身体をよく洗った、いやな臭いのしない人びとであるにはちがいあるまい[102]」とジャン・プレヴォーが喝破した「HAPPY FEW」に、ベランジェが含まれているとしても、彼の《民衆》は含まれていない。それゆえ、韻文や散文の違い、スタンダールが詩を好きではなかったことなども、ベランジェをスタンダールが本当には愛さなかった第一の理由ではないのではないか。ベランジェの《民衆》とスタンダールの《民衆》の決定的な違いこそが、二人の間の埋められない差異であると思われる。

スタンダールがベランジェを大変愛していたという、あまりに固定化された観念をいくらかでも打破することに成功したかどうかはともかく、真実はスタンダールの墓の中にある。

最後にモンマルトルの墓地にあるスタンダールのイタリア語碑文とペール=ラシェーズの墓地にあるベランジェの碑文を並べておく。後世の人々が選んだこの墓碑銘も、スタンダールとベランジェの間の内的距離を表しているように思えてならない。

ベランジェの墓碑	スタンダールの墓碑
BÉRANGER	ARRIGO BEYLE
POÈTE NATIONAL	MILANESE
NÉ À PARIS, LE 19 AOÛT 1780	SCRISSE
MORT LE 16 JUILLET 1857	AMO
	VISSE
	ANN. LIX. M. II.
	MORI IL XXIII MARZO
	M.D. CCC. XLII.

註

※引用文は、基本的に邦訳のあるものはそれぞれの邦訳に従ったが、文脈によっては改訳を施したものもある。

※表記の統一上、引用文も含めて、漢数字は慣用的なもの以外全てアラビア数字に変更した。

1)後述する、《シャンソニエ》の定義を参照。
channsonneir politiqueという名称がベランジェには最も適切かと思われるが、《シャンソニエ》ベランジェは、シャンソン詩人、時局諷刺詩人、民謡詩人、自由派の詩人・歌手、政治的社会的諷刺詩人などと日本では紹介されている。

2)ゲーテもまたその一人である。1827年1月4日のエッカーマンとの対話の中で、ユゴー、マンゾーニ、ラマルチーヌ、ドラヴィーニュの詩を褒めた後、ベランジェに言及している:「いったい古典派はあの傑物ベランジェにも反対だったのだろうか、と私はゲーテに質問した。「ベランジェの詩作するジャンルは」とゲーテはいった、「世人に馴染みのふかい、もっと古い、伝統的なものだ。しかし、彼でも、多くのことで、彼の先人たちよりも自由に動いたし、だからこそ杓子定規な党派からは敵視されたのだよ」」(エッカーマン『ゲーテとの対話』上(山下肇訳)、岩波文庫、1968年、252-252頁)

3)Stendhal, *Paris-Londres Chroniques*, Édition, présentation et traduction de Renée Dénier, Stock, 1997, p.387.

4)*Ibid*., p.584.

5)*Ibid*., p.397.

6)Henri Martineau, *Petit dictionnaire stendhalien*, Le Divan, 1948, pp.49-52. ; *Dictionnaire de Stendhal*, Honoré Champion, 2003, pp.95-96.
とりわけ、上記『スタンダール辞典』の書き出しの部分は、スタンダールがベランジェを手放しで褒めているという印象を強く

与えることに貢献していないだろうか：「スタンダールの寵愛を受けた同時代の文学者たちは非常に数が少なかった。クーリエやメリメを除いて、ベランジェはおそらくスタンダールが絶え間なく高く評価し、絶えず称賛した唯一の作家である」（*Ibid*., pp.95-96.）

7）Stendhal, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor Del Litto, Paris : Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 2 vol., 1981-82, t.II, pp.495-496.

8）Henri Martineau, *Petit dictionnaire stendhalien*, *op.cit*., pp.51-52.

9）粕谷祐己：《Pierre-Jean de Béranger et Stendhal》（2008年5月24日、第50回スタンダール研究会、研究発表、於青山学院大学）

10）P. J. de Béranger, *Ma biographie*, Perrotin, 1859, pp.1-2.

11）Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, in *Œuvres romanesques complètes*, t.I, Pléiade, Gallimard, 2005, p.671.

12）林田遼右、『ベランジェという詩人がいた　－フランス革命からブルボン復古王朝まで－』、新潮社、1994、29頁。

13）同上、11頁。

14）*Dictionnaire de la musique en France au XIXe siècle*, Fayard, 2003, p.241.

15）林田遼右、前掲書、30頁。

16）*Dictionnaire de Stendhal*, *op.cit*., p.96.

17）Michel Crouzet, *Le naturel, la grâce et le réel dans la poétique de Stendhal　Essai sur la genèse du romantisme*, Tome II, Flammarion, 1986, pp.87-88.

18）To the happy few

Toute ma vie j'ai désiré être lu par fort peu de personnes, trente ou quarante, des amis comme Mme Roland, M. de Tracy lui-même, le g [énér] al Miollis, le g[énér]al Foy, Mme de Barkoff, φλιψιδιου de Bullow, Béranger.（*Stendahl*, *Chroniques italiennes II*, *in Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, t.19, 1967-74, p.21.）

林田遼右は、前掲書で、同じ箇所を問題にしていると思うが、「これらロマン派の人々は、ベランジェよりはるか年下であるが、ベランジェとさほど年齢が違わないスタンダール（3歳年下）も、ベランジェを非常に尊敬していて、彼の代表作の『赤と黒』の中で、彼を当代きっての大詩人と言っている。この小説は、《少数の幸せな人に》という献辞を持っている。スタンダールはせいぜい30人か40人の読者及び数人の友人に読まれればいいと書き、その中にベランジェの名をあげている 」（前掲書、310頁）と述べているが、正確ではない。

また《To the happy few》については、Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, *op.cit*., p.1138n.を参照。

19）Stendhal, *Correspondance générale*, t.III, Honoré Champion, 1999, p.37n.

20）*Ibid*., p.38.

ジャン=トゥシャールは、この送付先のリストは、1817年8月2日発売の『イタリア絵画史』のためとしているが（Jean Touchard, *La Gloire de Béranger*, t.I,p.336, Armand Colin, 1968）『書簡集』新版を見る限り『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』であると思われる。もっとも、トウシャールはディヴァン版に依拠している。この箇所に付けられた編集者の註が、新版では《Service de presse de *Rome*, *Naples et Florence en 1817*》（*Correspondance générale*, t.III, p.38n）となっていて、『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』を指していることは明白である。ディヴァン版を踏襲したプレイヤッド版でも同じ箇所に註が付けられてはいる が《Il s'agit de l'envoi de l'*Histoire de la peinture en Italie*.》（*Correspondance*, t.I, Pléiade, Gallimard, 1968, p.1393n.）となっていて、『イタリア絵画史』の送付が問題となっている。ここは『書簡集』新版に従った。

21）Jean Touchard, *op.cit*., p.340n.

また『アンリ・ブリュラールの生涯』の記述は以下の通り：「文学技術にかんする、いなむしろ文体にかんすることをのぞき、またそこから厳密にラシーヌ、コルネーユ、ボシュエなどにかんする判断だけをのぞけば、ラ・ブリュイエールなどは、1836年には、ボニ・ド・カステラーヌ夫人の家に集まる社交界の機知メリメ、モレ、コレフ、私、兄のデュパン、チエール、ベランジェ、フィツージェームス公、サントレール、アラゴ、ヴィルマンの諸氏で構成されるだろうところの社交界の機知より劣っている」（*Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor Del Litto, Paris : Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 2 vol., 1981-82, t.II, pp.923-924.）

22）林田遼右、前掲書、12頁。

23）Stendal, Souvenirs d'égotisme, *op.cit*., p.429.

24）*Ibid*., p.425.

25）*Ibid*., p.428.

26）*Ibid*., pp.495-496.

27）*Ibid*., pp.504-505.

28）ベラジェのシャンソンについては、以下の『シャンソン集』

を参照した: Béranger, *Chansons de P.-J. de Béranger anciennes et posthumes*, Perrotin, 1856.

29）Jean Touchard, *op.cit.*, p.22.

30）このあたりの経緯については、林田遼右の前掲書（19-20頁）および、Jean Touchard, *op.cit.*, pp.22-27.を参照。

31）ド・ベランジェ氏という呼び方は、特に『イギリス通信』において目につく。

32）このあたりの経緯は、ヴィクトール・デル・リット『スタンダールの生涯』（鎌田博夫・岩本和子訳）、法政大学出版局、2007年、173-174頁および235-236頁を参照。

33）Stendhal, *Lucien Leuwen*, in *Œuvres romanesques complètes*, t.II, Pléiade, Gallimard, 2007, p.169.

34）Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, in *Voyage en France*, Pléiade, Gallimard, 1992, pp.49-50.

35）Stendal, *Souvenirs d'égotisme*, *op.cit.*, p.472.

36）*Ibid.*, p.472.

37）Stendhal, *Correspondance générale*, t.VI, Honoré Champion, 1999, pp.538-540.

38）Stendhal, *op.cit.*, p.204.

39）Cf. Stendhal, *Paris-Londres Chroniques*, *op.cit.*, pp.383-387..

40）*Ibid.*, p.822.

41）Jean Touchard, *op.cit.*, pp.299-300.

42）Béranger, *Ma biograohie*, *op.cit.*, p.160.
クーリエは1821年4月28日に2ヵ月の禁錮と200フランの罰金を宣告される（Jean Touchard, *op.cit.*, p.299.）

43）鈴木昭一郎「年譜」（桑原武夫、鈴木昭一郎編『スタンダール研究』所収、白水社、1986年、261-263頁）。

44）Jean Touchard, *op.cit.*, p.336.

45）ベランジェは、9ヵ月の禁錮と1万フランの罰金を宣告され、1828年12月10日から1829年9月22日まで入牢している（*Ibid.*, p.423.）。

46）*Ibid.*, p.423.

47）鈴木昭一郎編「年譜」（前掲書、280および282頁）。

48）Stendhal,*Vie de Henry Brulard*, *op.cit.*, pp.928-929.

49）Stendhal, *Paris-Londres Chroniques*, *op.cit.*, p.397.

50）林田遼右、前掲書、196-197頁。

51）Béranger, *Ma biograohie*, *op.cit.*, p.159.

52）Jean Touchard, *op.cit.*, p.399.

53）Béranger, *Ma biograohie*, *op.cit.*, p.159.

54）V.del Litto, *La vie intellectuelle de Stendhal Genèse et évolution de ses idées*（*1802-1821*）, Presses universitaires de France, 1962, pp.503-543. ; 鈴木昭一郎『スタンダール』、清水書院、1991年、113-119頁。

55）P.-G.Castex, *Lamartine et Talleyrand à l'hôtel de La Mole*, *in Romantisme* n°1-2, Flammarion, 1971, pp.166-167.

56）*Ibid.*, p.167.

57）*Ibid.*, p.167.

58）Jean Touchard, *op.cit.*, pp.399-412.

59）Cf. Gilbert Durand, *Le Décor mythique de "la Chartreuse de Parme"*, Corti, 1961, pp.159-174.

60）Jean Touchard, *op.cit.*, pp.399-400.

61）実際に読んでいれば何か書き残していると思われるが、スタンダールの言及は見あたらない。

62）Jean Touchard, *op.cit.*, pp.398. ; 林田遼右、前掲書、200頁。

63）ビブリオフィル版注釈者によれば、バークベックの著作は1818年に出版されているので、これらの事件に言及できるはずがないとのこと。スタンダールの虚構もしくは隠れ蓑として使われたようだ: Stendhal, *De l'amour, in Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, t.4, 1967-74, p.440n.

64）*Ibid.*, pp.191-192.

65）Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, *op.cit.*, p.583.

66）*Ibid.*, p.616.

67）コレに関しては以下のものを参照：*Ibid.*, p.1114n ; Stendhal, *Paris-Londres Chroniques*, *op.cit.*, pp.445-446. ; 林田遼右、前掲書、33-34頁。

68）Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, *op.cit.*, pp.707-708.

69）Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G.Castex, Classiques Garnier, 1973, pp.630-631n.

70）林田遼右はベランジェを殉教者に仮託する：「知人や出版社の危惧をよそに、あえてシャンソン集を出版し、殉教者のように、断罪されて入獄したこの時期は、シャンソンによって自分の行動を人々に知ってもらうのに、またとない機会だった」（前掲書、197頁）。

71）Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, *op.cit.*, p.576.

72）Maurice Bardèche, *Stendhal romancier*, La table ronde,1977, p.393.

73）拙論（修士論文）：『『パルムの僧院』における「詩人」の役割−Fabrice, Ferrante Palla, Ludovicについて−』、1987年1月9日南山大学提出。

74）Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, éd. Antoine Adam, Classiques Garnier, 1973, p.209.

75）*Ibid.*, p.422.

76）*Ibid.*, p.390.
77）*Ibid.*, pp.387 et 389-390.
78）*Ibid.*, p.117.
79）*Ibid.*, p.389.
80）*Ibid.*, p.389.
81）アーヴィング・ホーが、「フェランテのロビンフッド的自由主義」（Ferrante Palla's Robin Hood liberalism）と呼ぶものは、サンセヴェリーナ公爵夫人を魅了する：Irving Howe, *Politics and the Novel*, Books for Libraries Press Freeport, 1957, p.45.
82）《追い剥ぎ－詩人－共和主義者－死刑囚》のフェランテ・パラは、「ラスネールのように」とも形容される『ラミエル』草稿の《コルネイユやモリエールを読む盗賊 》ヴァルベールに重なる：Stendhal, *Lamiel*, Éd. d'Anne-Marie Meininger, folio, 1983, pp.240-242.　また、『回想録』にはその拙い詩が収められている《詩人－人殺し》のラスネール、武装蜂起する「人民の護民官」バブーフを、フェランテのモデルとして、いずれ改めて論じたい。以下のものは比較的簡単に入手できる：Lacenaire, *Mémoires et autres écrits*. Édition établie et revue par Jacques Simonelli（2e édition）, José Corti, 1998.；平岡昇『平等に憑かれた人々　－バブーフとその仲間たち－』、岩波新書、1973年。
83）Honoré de Balzac, *Étude sur M. Beyle*（*Frédéric Stendhal*）, in Œuvres complètes, Cercle du Bibliophile, t.25, 1967-74, p.489.
84）バルザック『幻滅』I（生島遼一訳）、河出書房新社、1961年、204-205頁。
85）同上、205頁。
86）同上、225-226頁。
87）モンタネッリ、ジェルヴァーゾ『ルネサンスの歴史』（藤沢道郎訳）（上）、中公文庫、1985年、77頁。
88）同上、77-78頁。
89）同上、81頁。
90）Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, p.215.
91）*Ibid.*, p.215.
92）Cf. Yves Ansel, ≪D'un nouveau complot contre la poésie≫, *L'Année Stendhalienne*, 1, 2002, pp.83-102.；鈴木昭一郎『〈評伝〉劇作家スタンダール』、白水社、2002年。
93）ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級　19世紀前半のパリ』（喜安朗、木下賢一、相良匡俊共訳）、みすず書房、1993年、379頁。
94）拙論参照：『『パルムの僧院』における「詩人」の役割－Fabrice, Ferrante Palla, Ludovicについて－』、13-16頁
95）Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, pp.281-282.
96）*Ibid.*, p.392.
97）警視総監の布告まで出された《国民詩人》ベランジェに対して、デル・リットが再録している、簡素なスタンダールの葬儀案内状を見よ：ヴィクトール・デル・リット『スタンダールの生涯』、前掲書、302頁。
98）林田遼右、前掲書、7頁。
99）同上、9頁。
100）Stendhal,*Vie de Henry Brulard*, *op.cit.*, pp.686-687.
101）ドニ・プロ『崇高なる者　19世紀パリ民衆生活誌』（見富尚人訳）、岩波文庫、1990年。
102）ジャン・プレヴォ『スタンダール論』（加藤民男訳）、審美社、1969年、116頁。